

# 未来のために

ここでは、私たちの未来を考える上でとても重要な視点である共に生きる社会、多文化共生について専門家である羽賀友信さんにシリーズでご寄稿いただいています。



筆者：羽賀 友信さん

- ・長岡市国際交流センター「地球広場」センター長
  - ・新潟 NGO ネットワーク顧問
  - ・JICA 地球ひろば 国際協力サポーター
  - ・長岡市教育委員
  - ・JICA 専門家
- ※当事業団多文化共生アドバイザー

## 熊本の海外観光戦略の可能性

現在、地方創生の動きとともに、少子高齢化と人口減少による地域の疲弊の問題が大きくクローズアップされています。他方、日本を訪れる外国人観光客の数は、年間 1,300 万人を超え、日本の持つ地域資産や文化などの価値の見直しが始まっています。

地域を見ると、全国的に在住外国人の数は、減少傾向（九州においては増加傾向）にあります。定住化、永住化は進んでいます。定住者、永住者は、長期的な展望を持ち、ローンを組む、家を建てる、車を購入する、子どもの教育に投資するなど、消費活動の面においても地域経済に貢献しているほか、経済活動においても地元企業を支えていたり、地域福祉の面においても大きな影響を与えています。

観光戦略においても、彼らが地域の担い手として貢献すると、大きな可能性が見えてきます。通訳、翻訳等にも力を発揮できるほか、異文化の視点から日本や地域の魅力を発信してくれることが考えられるのです。

また、移動人口としての観光者も、ゴールデンルートと呼ばれる東京や京都を中心とした伝統的な観光ルートだけでなく、リピーターは、地方の原風景や小さな観光地に興味を持ち始めています。大都市中心の観光戦略だけではなく、地方の固有性を生かした観光地の発信が大きな課題になってきているのです。特に LCC（格安航空会社）の発展とともに、アジア圏からの旅行者は、東京に飛ぶよりも近く、安い九州にメリットを感じています。

熊本に的をしばってみると、阿蘇の火山、温泉、祭り、赤牛、馬肉、有明海の新鮮な海の幸、からし蓮根などの郷土食、地下水を活用したおいしい水道水、熊本城を中心にした歴史文化、蒸留酒の代表の焼酎、醸造酒の代表の日本酒もおいしいものがたくさんあり、ここにおもてなしの心を活用すれば、非常に魅力あふれた観光戦略が立てられます。さらに別の視点から見れば、医療観光なども新しいジャンルとして大きな可能性を含んでいます。

また、3.11 以降、アジアからの修学旅行が 80% くらい増加したというニュースを聞きました。その多くは都会観光だけではなく、地方で日本固有の体験型の観光を楽しんでいます。都会では持ちえない、地方にしかない資産を徹底的に活用し、どう発信し、どう受信していくかという戦略が問われているのです。

もう一つの可能性が、留学生の受け入れです。現在、留学生のほとんどはアジアを中心とした途上国や中進

国から来ており、欧米からの留学生の数は伸びていません。しかし、短期で日本の文化を学びながら留学したい学生はかなりの数に上っており、短期留学制度をギャップイヤー（高校卒業後、大学入学までの間にボランティアやインターン、国内外留学をすること）と組み合わせると、可能性は大きくなると思います。

これまで量的な可能性の話を進めてきましたが、日本の強さは質的な深さをもった文化があるということです。ロシアなどで日本語を勉強する人たちの中には、日本人が理解できない古典をかなりのレベルで習得している人が多くいます。またフランスやドイツなども日本の伝統文化に深い造詣の念を持っており、さらに踏み込んだ観光の必要があります。

団体旅行中心から個人旅行へとシフトが進む中で、地域が考えなければいけないことは、彼らがどう情報をとり、どう行き先を決め、どう移動するかということ深く掘り下げることです。

たとえば、Wi-Fi を整備し、多言語で観光情報を入手しやすくする、居酒屋や食堂のメニューを写真で表示する、郷土料理を Wi-Fi で検索すれば多言語で表示される、移動手段としてのバスは路線ナンバーを入れ、ステーション名を日本語が理解できなくてもわかるようにナンバーで表示する、また外国語通訳や言語になるべく頼らずに観光ができるように、ピクトグラム（絵文字）などの普及を進め、ユニバーサルデザインを中心に据えるといった政策が必要になってきます。

これらは多文化共生の推進というジャンルに組み込まれることですが、外国人にやさしいまちづくりを進めるということは、お年寄り、子ども、障害者にもやさしいまちづくりになります。

長岡市でも中越地震以降、中山間地の集落に JICA 研修員や外国人研修員の受入れを進めてきましたが、一番喜ばれるのは、ホームステイと、地域の人々との「どんちゃん騒ぎ」という交流活動です。お互い言葉は通じなくても、心は通じるという大切な財産を手に入れ、短い滞在でも別れが辛くなるような密度の濃い交流ができます。過疎地では若者が減り、活気がなくなっていますが、こうしたおもてなし交流を通してお年寄りが地域の誇りと自信を取り戻し、今では「ぜひ海外からのお客さんを紹介してください」と頼まれるまでになっています。ここにも大きな観光のヒントが見られます。熊本は、地理的にも日本のゲートウェイになれる可能性が大きな地域だと思えます。